

《修士論文要旨》

日常解離体験と原子価構造に関する実証的研究

福 島 恵*

I. 問題と目的

解離とはDSM-IVによると「意識、記憶、同一性、あるいは環境の知覚という日頃は統合されている機能の破綻」と定義されており、西村（2001）は解離に関する多くの研究において解離の定義は「正常な統合機能の分断」で一致している、と述べている。また野口（2007）は「解離」として定義され記されている全ての現象が病的なのではなく非病者の日常生活の中にも認めることができる、と記述し、舛田・中村（2005）は「解離」を一種の正常な心理的機制とし、日常生活の中で体験する解離を「日常的解離」と命名した。

解離を測定する尺度として最も用いられてきているのがPutnem & Bernstein（1986）のDES（Dissociative Experiences Scale、以下DES）であるが、小川・田辺（2001）によるとDESは下位因子の存在が確認されておらず、解離の水準として全項目の平均が用いられており症状が見逃されてしまう可能性がある。その他の尺度も下位因子の存在が曖昧に検討されているのがほとんどであるなど、課題を残したものが多い。そこで下位因子の存在を明らかにするために、「日常的解離」に関して新しい尺度を作成することを第1研究とした。

II. 第1研究

日常生活の中での解離体験を測定するための尺度を作成し、その構造を吟味して下位因子を明確にすることを第1研究の目的とし、須永（1996）の『非現実感尺度』、松下（2000）の『離人感尺度』、中村（2006）の『日常的解離尺度16項目版』を参考に全18項目の尺度が完成し『日常解離体験尺度』と命名した。この日常解離体験尺度を、大学生100人を対象に配布しSPSSを用いて分析を行った結果、信頼性は $\alpha = .940$ と高く、因子分析の結果、3つ因子が抽出された。それぞれ<自己・対象の存在に対する認識の欠如><心的機能不全><対象との連結に対する認識の欠如>と命名した。

今回の研究によって解離には複数の下位因子が存在することが明らかになった。そして作成された尺度の項目の多くが対人関係場面に関係している点などから、解離は個人の対人関係の性質や、あるいはBion（1961）やHafsi（2006, 2010）の言う『原子価構造』となんらかの関係があると考えられる。そこで第2研究において、原子価の観点から解離についての検討を行った。

III. 第2研究

「原子価（Valency）」とはHafsi（2006, 2010）によって「対象との一定の安定した類型による繋

平成25年度 *社会学研究科社会学専攻 臨床心理学コース

がりを可能にする個人的な無意識的な心的準備状態である」と幅広い定義がなされている。原子価論からみれば、人は少なくとも2つ以上の原子の種類からなる「原子価構造」を持っており、最も頻繁かつ瞬間的に示される原子価を「活動的原子価、以下ACV」と呼び、活動的原子価によって結合が成立しない際に示される幾つかの原子価を「補助的原子価」と呼んでいる。原子価の種類として、依存の原子価、闘争の原子価、つがいの原子価（以下PV）、逃避の原子価（以下FLV）の4つが考えられている。上記に述べた原子価構造は原子価論から見ると「正常な原子価構造」であり、活動的原子価の1つしか原子価を所有しない「過度の原子価」、いかなる原子価も示すことのできない「過少の原子価」、活動的原子価を示すことのできない「未分化の原子価」の3つを含めた「マイナス原子価構造」の存在も確認されている。

第2研究ではこの原子価論の観点から解離についての実証的研究を行うために、仮説として「マイナス原子価構造を持つ人は、正常な原子価構造を持つ人よりも解離傾向が高い」、「原子価の種類によって解離の表出方法が変わる」を提示した。仮説を検証するために原子価構造を把握している大学生123人を対象に日常解離体験尺度を実施し、その後SPSSを用いて分析を行った。

信頼性分析の結果、全体の α 係数は.902であり各因子もそれぞれ高い信頼性を得ることができた。次にt検定によって原子価構造と日常解離体験尺度の因子得点を比較・分析した結果、第1因子において正常な原子価との間に優位な差が見られた ($t=1.957, df=85.495, p<.05$)。そして正常な原子価構造の種類と、日常解離体験尺度の3つの因子を一元配置分散分析によって比較した結果、第1因子に優位な差が見られ ($F(3,111)=2.292, p<.05$)、特にF1・P間に優位な差があることが認められた ($p<.05$)。さらに123人のF1の平均値を算出し高群と低群とに分け、t検定を用いて因子得点との比較を行った。その結果、第1因子と第2因子においてF1の高群との間に関連があることが見出された (第1因子、 $t=-2.046, df=96.622, p<.05$)、(第2因子 $t=-1.824, df=110.9933, p<.05$)。

以上の結果から、正常な原子価構造を持つ人の方が解離との関連が高かったことから、解離は適応的に用いられている可能性がある、というHilgard (1997) や田辺 (2006) を支持するものとなった。

さらにF1が解離との関連が深かったことから、解離にはF1の特徴である対象との間に一定の感情的距離を保つことが関係していると考えられる。つまりはF1をACVとする人は対人関係場面や対象との連結は認識されたままで、存在への認識を薄くすることで葛藤を回避し環境に適応していると考えられる。このことは、池田 (2011) の関係性の希薄さが解離性体験に影響を及ぼす、という理論を支持するものとなった。以上2つの結果からF1が解離に関係していることが判明し、F1の高群、低群と日常解離体験尺度の因子得点を比較した。その結果、F1の高群と第1因子、さらに第2因子に関係があることがわかった。このことは、既述の通り場面で生じる葛藤や脅威から自分を守るためにF1を用いて適応している可能性が考えられる。

Ⅳ. 参考文献

- Hafsi, M. (2010). 「絆」の精神分析～ピオンの原子価の概念から「原子価論」への旅路～, 株式会社ナカニシヤ出版.
- 廣澤愛子. (2010). 「解離」に関する臨心理学的考察－「病的解離」から「正常解離まで」-. 福井大学教育実践研究, 35, 217-224.
- Hilgard, E. R. (1977). *Divided Consciousness-Multiple in Human Thought and Action*, CANADA: Wiley-interscience.
- 池田龍也, 岡本祐子. (2011). 関係性の持ち方と解離傾向の関連－正常解離の下位機能における性差に関する基礎研究－, 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 10.
- 升田亮太, 中村俊哉. (2005). 日常的解離尺度（短縮6項目版）, 日常的分割投影尺度（短縮8項目版）の構成概念妥当性の検討, パーソナリティ研究, 13(2), 208-219.
- 田辺肇. (1994). 解離性障害と心的外傷体験の関連, 催眠学研究, 39, 1-10.